羽鳥一紅 〈文月浅間記〉 ふみづきあさまのき

天明三年水無月の末の九日、小雨降てをやみたれと猶きりこめたるやうにて、打ちるは何ならむと硯のふたあふきなとに請て見れは灰なり。やかて草木の葉にかゝりて霜の置たるかことし。こは信濃なる浅間か嶽のもゆるとはいにしへよりいゝふるし、此国にはたまさかにあることなれは、人も見なれておとろかす。

文月の二日またふりいたし、こたひは薄雪のことくさえたる月夜の如く、かくあることはとよとしのしるしなりと賤のことくさにいゝあへり。

はた五日の昼過る頃、浅間の山なりいてゝやり戸障子に響たれは、又もや灰のふるらむと見るに、いかめしき雲の一むら立おほひ、乾のかたへなひきたれはことなくて日暮にけり。

其夜もあけて六日の朝またき、おき出て見れは庭もまかきも白妙(1)に、木の葉残らす花咲たることし。雪のあしたのけしきにて、いとめつらかなるなかめ也。扨うまや路なれは家〳〵よりいてゝかきよせ、たこに入、箱にもり、又は俵にもしつ。かくするうち、空はなこりなく晴て日影いとあつし。ことしは土用も時ならす涼しかりしに、此まゝにて日和つゝきなは稲葉もしけりなんといふに、末の半過る頃又浅間山鳴りいつる。こたひはいつ〳〵よりもはけし。立出て見れは北南ははれわたり、西より東へ黒雲(2)たなひき、行先目のはてもなし。此けふりのゆくかたはいつこまてかふるらむ。遠近人のみやはとかめむ(3)と詠しは、かくおそろしき雲にはあらし。思にもゆるけふりのたちのほる(4)はかりにてありけらしなといふうちに雲ひろこりて、黄昏過る頃さら〳〵とふり出たるは雨なるらんとおもふに、さはなくて砂ふる事おひたゝし。空はむはたまの(5)やみの中より稲妻きらめきわたり、いかつちおとろおとろしく鳴はためきて、浅間の嶽よりもえあかるは花火の如く、柳桜のちりかゝるやうなるうちに、玉はしり飛火かけ見ゆ。夜もすから砂ふりいかつちなりやます。

いねもやらて起あかして七日になりぬ。つとめて見れは、さきの夜ふりたるよりはあらき白砂高くつもりて、板屋の石もうつもれたり。ゆき来のさはりなれはとてかきあつめたれは、かと〳〵に時ならぬ雪の山つくり出せり。こゝらのよはひにかうやうの事はいまたきゝも伝へす。宝永の頃不二の焼たるもかくや(6)有けむ。されとさかひはるかにへたつれは、かゝる事の有ともきかす。人〳〵打寄てたゝあやし〳〵といふうち、午の半も過る頃にはかに日暮にけり。空は墨をすりたることく、稲妻なかくひらめきわたり、鳴神かしらのうへにおちかゝることく地の底へひゝきて、うへ下にて鳴合たり。山はいよ〳〵鳴りとよみ、やり戸障子にひゝきかよひてはつるゝはかりふるひうこかし、

風もふかぬにえもいわすなまくさき香の時〳〵して、鬼出来らむとおちおのゝきくれまとひてものもおほへす。世ははやつきぬるにやとおもふに、せむすへなくたゝうつふしに臥居たり。何のあやめもわからねはともし火てらしてあつまり居るに、たま〳〵大路行人も松なともとして行かふさま、とこやみの世となるに似たり。

やゝ鳴神も遠くなるまゝにかしらもたけて見れは、まとのさうしにうつりたる空の色紅のことく見ゆ。こはいかに、この上に氷ならぬまことの火の雨もやふりくらむといきたるこゝちもせて、ひとつ所に寄居つゝわひあへり。とかくするうちに赤き色すこしつゝさめて、漸ゝ人のおもて白〳〵と見え夜明にけり。やりとおしひらきて見出したれは、いまた時は申の半にて有ける。あやしや狐のまとはせるにこそとあきれてなかめやれは、空はうす黄はみて雪のふるへき色なるに、鳴神たえ間もなく、雨は一雫も落すたゝ砂のみふりて、ふる音は次第にはけしく、垣根にあたるはあられのたはしる如く、さき〳〵より大きやかなるましれり。いつまてかくてあるらん、かかるあやしき雲の立時はよそへ追やる事ありとて、七尺斗なる伊勢の御祓、二間はかりなる幣帛のまねひをして、石尊の大太刀をになひつれ、高燈灯纏をしたて、貝をふきかねつゝみをならし、おにをしはりてん、亦浅間山火焼ばゝをとらんといふ声かまひすし。耳をふたき目をおほふはかりなり。ひかるにもおそれす夜一夜呼のゝしりあるくに、神もまけしとなりひゝき、砂はなほ〳〵荒〳〵しく音して、あたる所とほりつへく降くらす。今宵はほしの合ふ夜なれとおもひもかけすたゝおそろしくて、手をつくりひたひにあて神ほとけたすけ給へと経よみ念仏して明るを待、からうして八日になりぬ。

今朝は猶先のよりあら〳〵敷まさこの黒くきはみたるか高やかにふりつみたり。板ひさしたわみ落、さゝやかなる家ともは柱をれ壁しろ離れて灰たるもあり、たちまちにたふれてうつはりの下より這出るもあり。是におとろきてさはかり神鳴光るにも恐れす、人々家のうへにあかりてふりつみたる雪をかきおとすに、黒けふり立てすさまし。この音にまきれものにあたる音なきは雨になりけりと見れは、ひちりこのふるなり。家のうへにのほりたる人もみな〳〵小田の代かきたるなりして逃下りぬ。いつこかはや泥の海になりたるらんとおちおのゝき、とはかり有てやみにけり。はらひ落せし砂は軒端とひとしくなりて、いつちへかきやらむかたもなけれは、大路小路にひきならしたれは、其上をゆきかふ人のあしもと見あくるはかりになりぬ。さて見れはいとしろくつやめきたる毛四五寸はかりなる、長きは尺にあましたるか降きて人毎にひろふ。

其日しはし鳴神の隙をもとめて前橋てふ処へ行たる人の逃かへり

てい気(き)もしあへす、おそろしきことのかきりを見つるかな、実政の渡(9)は利根川のせまりたる所にて常さへ水はやく底深ふして水藍よりも青し。岸打波もくたけちるほとなれは少しの水にも舟をいたさす。高き所に関をすへて是を守り、行かゝりたるものとく船に乗らむとする時、むかふの関より笠をあけて水上をさし教ゆ。何事にやと見やれは、川上弐丈はかり高く山のやうにうねりて大蛇のことくなるもの頭をふたつならへておしきたる。跡をも見す逃のひて漸ゝ高き所によりて見れは、大木根なからぬけてなかるゝにやあらむ、たゝすさましくてよくも見分す。水は硯の海の色して、七八間はかりなる火石黒けふりうつまきなかれ行中に、かすかに人の声の今をかきりと泣さけひて波の上にきこゆるもあり。犬の声牛馬のおめきて行もきこゆ。あるは家の二階にのほり、屋根に乗りなからなかれてたちまち水の底にしつむらん、かなしき声ともして消失たる男女の数しらす。簞笥長櫃桶鉢の類、数を尽してなかれ行。俄に出たる水なれは、ゆくりなくはたおる台に乗なから、腰に絹を結つけたるもあり。

若き女せなに子をおひ前にもいたきて屋の上にたゆたふ。此子たすけ給へと声かきりなきさけへとも、ふねなけれはせむすへなし。岸の上よりさて網といふものをさし出すに、いたきたる子を其中になけ入るゝ。揚て又さし出す。せなにおひたるも投入て、女は手を合ておかみけり。其母をもたすけんと流に添て追行とき、火石なかれておしかゝる。家はくつれて波のそこに打込たり。

次第に泥押来り河も岡もひとつになり、矢を射ることき早瀬の水すこし静にたゝへたり。(10)坤軸といふものくたけて世界一度に泥の海になるとこそ、かゝる時や来ぬらん、気もたましゐも消はてぬ。

さはかりおそろしき中に、若き男老たる母とおさなき子をふたりつれたるか、子を捨て母をおひなかれ行。母声をあけて、我を捨て子ともをたすけよと泣さけふ。折しも長櫃の流れ来て、母をは櫃のうへにのせて立かへり、たちまちふたりの子をかたにのせ、波をふんてはしり来る。ちかくなると岸のうへに投上、母の跡をしたひ行。心さしや通しけん、母をもたすけけり。

若き女のおさな子をいたきて浮ぬ沈ぬなかれくる。岸ちかくなりたれとあかりかねたり。其子ははや死したりと見えて、川へ打捨はひあかり、声をはかりに泣ふしたり。

金葉　身にまさるものなかりけりみとり子はやらむかたなくかなしけれとも(11)、とはかゝることをやと、あはれはかなき事数ゝにて目もあてられぬ有様と聞に、なみたもとゝまらす。此国にかゝる水の出る事いつこならむ。草津なる白根の山のぬけたるらん(12)なんといふうちにひと日ふた日も過ぬ。

川原湯といふ所へ行たる人のかへりきて、ふしきに命たすかりてこゝまてはまかり来ぬと語れとも人まことゝおもふへからす。水にて家のやけるとは。そも浅間の山、水無月の末よりをり〳〵やけたるに、北の方半よりやけぬけて[13]震動する事百千のいかつち一度に落ることくして、大なる火石二十三十飛あかる事五丈十丈、あかり落る。下よりは飛あかり、中にて打あひくたけちるおと、きもたましゐをけす。五間七間の火石飛いつると、ひとしく硫黄なかれ出、泥押出し、山家草木其儘にとうやうしてなかれ行。其中に火石燃上り、七八丈の大木に火うつりて天をこかし地をうこかしやけひろこりて、是にふるゝもの金石といへともくたけすといふ事なし。押行道の村里家居草木ひとつものこらすやけうせぬ。泥の高さ七八丈、岡のうへ五六丈、泥にうつみ火にやかれ水に溺れて死すもの此あたり見るたにかそふへからす。しらぬあたりにうせたる人いく千万とも数しれす。人馬ともに泥中より頭はかりさし出し、いまた死せさるまゝあれともたすくることかなはし。水ならねは船行す、深けれは人行得す。たま〳〵浅き所ありても、火石のけふりやまされはあつくて足を入る事ならす。しやうねつ大しやうねつ[14]のくるしみもかくやらむと覚てあはれなり。

此折しも小笠原相模守と聞えし御方、御国許へおはしますとて碓氷峠のふもと松井田の駅にやとり給ふ[15]。其翌日[16]牧野遠江守ときこえし御方も此みちにゆきかゝり給て、一宿へたてゝ安中といふ駅にやとり給ふ。さらぬたにあらくけはしき碓氷の坂砂ふりうつみて人のゆきゝもたえたれは、爰に六日はとまり給ふ。さて有へきならねは召つれ給ふ人々して石砂をはらひ道つくり給へとも、こまのひつめもたゝされは、さはかりけはしき碓氷峠をかちよりそ越給ふ。あやしの賤もかよはぬみちを、さるやむことなき御方〳〵踏なれ給はぬ山坂をいかにものうく覚しけん。むかしは木曽の桟をあやふき事のたとへには命もかくるといゝけるに[17]、をさまれる世のたひらかに道行人もさはりなし。こたひ浅間の焼出てしはし碓氷の道たえぬ。いにしへ日本武尊此道ふみはしめ給ひしより[18]かゝるためしはあらさるへし。

夫より坂本軽井沢追分宿も石降こと盆をかたふけてうつすかことく、半はやけうせ残る家居も屋根を打ぬき、内に石つもるほとなれは、親をよひ子をたつね、命はかりに逃ちりて人なきさとゝなりにたり。広野は草の色もなく、鶉の床も焼うせて、きゝすの妻もこもりえす、臥猪の床[19]もあれ行は、犬狼のさとに出、行かふ人をあやむると聞に身の毛もいよたちぬ。

それのみならす、杢橋[20]といへるは高きこと河より五丈はかり、うへにこゆる水も五丈はかりとかや。さはかり大きなる水の勢ひ、天をひたし地にあふれ、関所をはしめ其筋の村里こと〳〵くおしなかし、桑

田変して海となる。こは山つなみといふものゝにはかに押出たるなるへし。

かくさはかしき中に、佐渡か嶋の流人、目籠てふのものに籠られて[21]三十五人三国越といふ所を行、其道杢橋にかゝる。此後は吾媛河にて、水上峯にそひへ谷深ふして千尋の底になかる。琴橋猿橋てうすのはし[22]、いつれもろはんか雲のかけはし[23]のことし。郡をへたてゝ杢橋より四五里[24]行て利根川におつる。杢橋のあたり流うせて河のむかひに住ものは矢ふみをもてとひかはす。さるほとなれは、金井といふ宿に行かゝりとゝまる。水は落たれと道ひらけす。幾日かこゝにありて、所のものこれを守るにいとくるし。

はた烏川も水まして、柳瀬の渡[25]もたえ、利根川のすへは十二間はかりなる火石横わたり流をせきとめゆかされは、水はわかれてひきゝ[ひくき]につきてくたる。田畑村里隔なく、国境を打越して本庄のうまやと傍示堂といふさとの間に横切て中仙道の南をなかれ行。すへて此道筋福島五料のせき[26]も跡かたなく、きのふまてさもゆゝしかりし家居もけふは飛鳥河[26]の瀬とかはる。河岸[28]〳〵は泥の入江となりて、高き所にある家等にはあたりの人寄あつまり、二階にのほり屋根にあかり、三日四日はものもくわす、水にかつへていかきといふものを泥の中にふせて目よりもりたる水をのみ露の命をさゝへたれとも、風の音すれは又もや水のますかときもをけし、雨の音を聞ては石砂のふるかとたましゐを飛す。わくらはに水をのかれたる所よりしるへのもの尋きたりても、泥ふかけれはあたりちかくより得す。あるは大木の梢にのほり二日三日ゆられたるは、次第に根くつろきて折たふれ水底に沈もあり。岸のうへにはねあけて、はからす命たすかるもありとかや。其ほとの心地いかならん。二三里四五里なかれてからきいのちひろひたるもあれと、家もなく子にはなれ、田畑をうしなひたるはいける甲斐なしとよゝとなくもあり。また、はたちにもたらぬ女の十六里か程なかれ来て希有にしてたすかりたるは、大慈大悲のちかひの網[29]にてすくひあけ給ふらんと尊し。

長野原[30]てふさとも、水のさはきにおそれて逃ちる中に、六十はかりの老女うま子をはたにおひて出たるに、泥の押来てそのあたりあとかたなくなりぬ。時は八日の巳の半なり。明て九日の未はかり、たま〳〵山深く入てのかれたる人打寄て、たれそれはいかになりぬらん、泥にや埋れたるか、なかれてや失たるらんといふに、地の底にかすかになく声のきこゆ。犬にまれ猫にまれ、いまたいけらんものならはたすけてんとおもへと、行へきやうなし。板戸障子やうのものを泥のうへに敷てはひわたり、声につきて爰なめりとおもふ所をかまもてかきやりたるに、きるものゝ忘りにかゝりて少し引出したり。さは人なりとひ

たみちに堀て引上たれは、おうはゝはや死して、肌に負たる子はいき出たり。いまた蛭子のよはひにてありける。其となりなる家にても五人までなかれてたゝ女なんひとり残りたるか、をさなき子ふたりまてうせたれは心ひかれて遠くも逃やらてさまよひ居たるか、是を見て我子のことをおもひかなしむをいさめて此子に乳をふくめさせたれは、うれしとやおもふかいきつきたるもらうたし。いとよくのみてめを見あけ、何心もしらて打ゑみたるもあはれなり。

空は日毎にかきくもり、月日の光もさやかならす。時々雨ふり霧のことくに灰打ちり、いかなる山なりとも底をつくして焼ぬらんとおもふに、此ほとふりつみたる砂石集は浅間山より高かるへきに、いまた残りてふる事は、こはそもいかなる天変のさとしにや。灰のふりたる所何十里ともしれすして、水の押て行めくりたる所凡五十里かほとは[31]たまつる[32]わさもせす、知らぬ世界に行たる心地す。まいて泥の入江に集たる人は爰に命究ぬるにやと、男女残らす髪を切てあみた仏をたのみたてまつり、たゝ空をのみ見あけて泣になみたもつきぬるとや。こと国にはかうやうのことありもやせん。此日の本のうちにしてかゝるためしきゝもつたへす。ふしきといふもおろかなり。

上毛高崎　羽鳥氏女　一紅述
茅花園
壺梅園　蔵板

こはかみつけの国高崎のうまやとり羽鳥氏の刀自一紅のうし、皇国ぶりのかんなもて眼のあたり見もしきゝもしかいつゞりたる此一巻、ちかきわたりの人々はさらなり、うちわたす遠かた人さへ、より〳〵に見まほしとさうぞこしてもとめ来せしに、そがさき〳〵をめぐり〳〵て、あはれくちなん事をおそれ、はたおのれがゆかりある事を知りて、友どちのすゝめけるがまゝ、こたび桜木にものして、其人々におくりまいらすになむ。文化十あまりふたとせといふとしの霜ふり月、多胡迺屋の直温がまをす。

底本は高崎市立中央図書館田嶋武夫文庫本
群馬県立歴史博物館研究紀要25より抜粋